

# 断簡

特集陳列

## 掛軸になった絵巻

Thematic Exhibition

Segments of Illustrated Handscrolls that became Hanging Scrolls

2013年7月17日 水 ~ 8月25日 日  
東京国立博物館 本館 特別1室

Wednesday, July 17—Sunday, August 25, 2013 Tokyo National Museum

絵巻をはじめとする卷子装の書画作品は、料紙を何枚も糊で継ぐことで長大な横長の画面を形成しています。ただ、経年により糊離れして一紙ごとにバラバラになってしまったり、茶室の床に掛ける「茶掛け」にするため、人為的に切り取られることがありました。

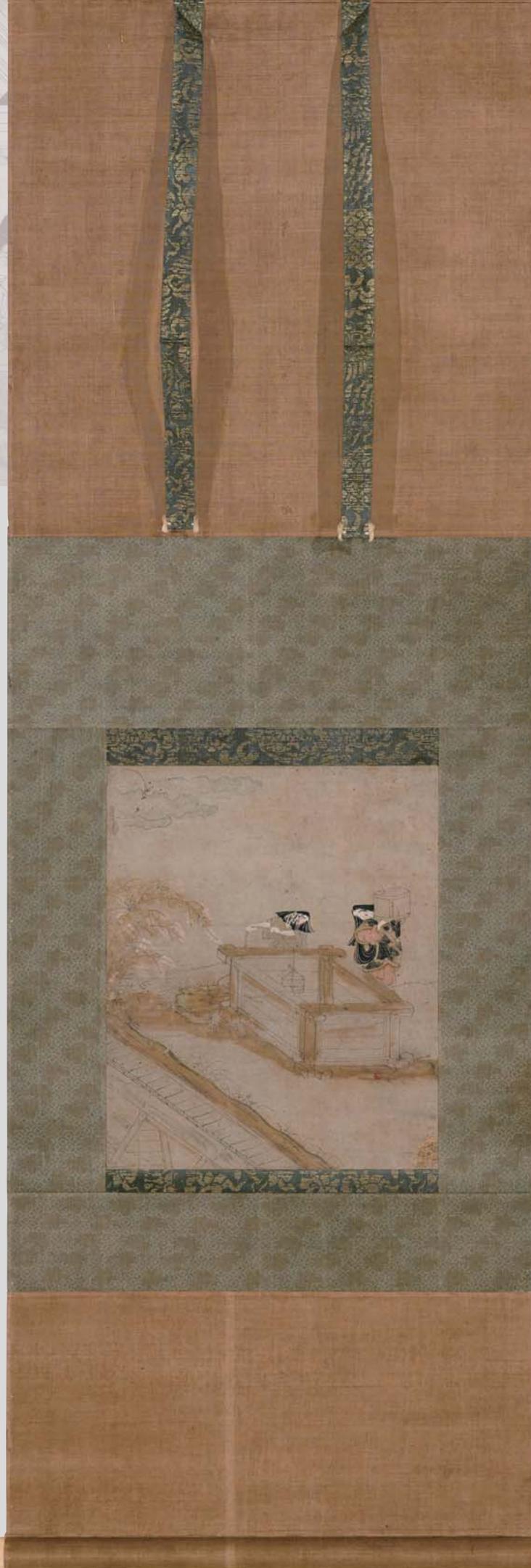
このように「残欠」となってしまった往古の絵巻作品を、本来は手許で巻き拡げる卷子から、掛幅(掛軸)などに仕立て直し、壁に掛けて鑑賞する形態へ変貌を遂げた作品を「断簡」と呼びます。断簡となることによって、どの物語のどの場面を描いたのか、分からなくなってしまった作品も少なくありません。

この特集陳列では、当館所蔵品を中心とした絵巻物断簡のうち、特に物語絵巻の断簡を五つのテーマからご紹介します。もとは一つの作品だった卷子装の絵巻と掛幅装の断簡、また絵巻が断簡となる前に写された模本などを見比べることで、絵巻がどのように守り伝えられてきたのかについても想いを馳せていただければと思います。

Handscrolls of calligraphy or painting, including illustrated scrolls, have long, oblong surfaces formed from sheets of paper pasted together with glue. However, over the years, some ancient scrolls have separated into individual pieces as the glue has weakened, while others have been intentionally cut into sections for use as hanging scrolls installed in the alcoves of tea ceremony rooms.

In Japan, segments of ancient illustrated scrolls are sometimes changed from their original handscroll form into hanging scrolls for adorning walls. There are many examples of these segments where it is now unclear which part of which illustrated tale they originally came from.

By displaying works mainly from the Tokyo National Museum collection, this exhibition introduces segments of illustrated handscrolls on five different themes. By comparing the works, which include illustrated scrolls that were formerly one work, segments that have become hanging scrolls, and copies of scrolls made before they were broken up, visitors can see how illustrated scrolls have been carefully preserved for future generations.



“掛軸になった” 男衾三郎絵巻断簡

# 再会する絵巻 「男衾三郎絵巻 断簡」

Tale of Warrior Obusuma Saburo

都の生活にあこがれる兄・吉見二郎と武芸一途の弟・男衾三郎の一族で起こった「継子いじめ」などを描く男衾三郎絵巻には、「オチ」とも呼ぶべき物語の結末が描かれていません。

吉見二郎の死後、娘の慈悲は男衾三郎の家で仕女として扱われながら、国司に求愛されるというシンデレラストーリーと思いきや、絵巻は男衾三郎が自分の娘を国司に妻合わせようとして失敗するというところで終わります。しかしながら、この物語には慈悲と国司がめでたく結婚するという結末が用意されていたに違いありません。おそらく、伝来の過程で結末部分が失われてしまったのでしょう。

このように、絵巻の一部が失われてしまいう例は多くありますが、幸いにもその一部が断簡として伝わることもあります。数百年前に分かれてしまいましたが、男衾三郎絵巻はもとの絵が再会を果たすことができた稀有な例と言えます。

- A 男衾三郎絵巻
- B 男衾三郎絵巻断簡
- C 男衾三郎絵巻(模本)



A 重文 1巻 鎌倉時代・13世紀 A-11889 (部分) 第七段絵  
第七段詞書  
第六段詞書

男衾三郎絵巻第六段の詞書には、吉見二郎の死後、その妻と娘の慈悲が、男衾三郎の家で粗末な衣を着せられ、日夜庭の水汲みをさせられたと記されています。ところが、絵巻では第六段の詞書と第七段の詞書が連続し、第六段の絵が欠落しています。

一方で、「千代能姫之画」という名で伝来したBの断簡は、草花や虫などの細部表現も男衾三郎絵巻に一致し、描かれた内容からも、もとは第六段の絵であったことが明らかです。あわせて、C男衾三郎絵巻模本に「原本には見えないが、別の模本にこの図があるので挿入する」と記されている際の図も、もとは第六段の絵を構成していたと考えられます。

この第六段の絵は古くより絵巻から分かれてしまいましたが、断簡や模本の存在によって往時の姿を偲ぶことができます。



B 1幅 鎌倉時代・13世紀 A-12370  
C 狩野晴川院(養信)ほか模 1巻 江戸時代・文化13年(1816) A-1676 (部分)

此一段不見本狩野祐清所蔵之模本在此因故模而入此者也  
池上佐六模  
此段不見本狩野祐清所蔵之模本在此因故模而入此者也  
池上佐六模

# 断簡を見比べる 「住吉物語絵巻 断簡」

Love Affair of Courtier and Girl at Sumiyoshi

住吉物語絵巻は詞書が失われ、数段分の絵のみを巻子装に仕立てていますが、このツレの断簡が国内外に数葉現存しています。その一方で、鎌倉時代には、いくつかの異なるバージョンの住吉物語絵巻も作られたようです。

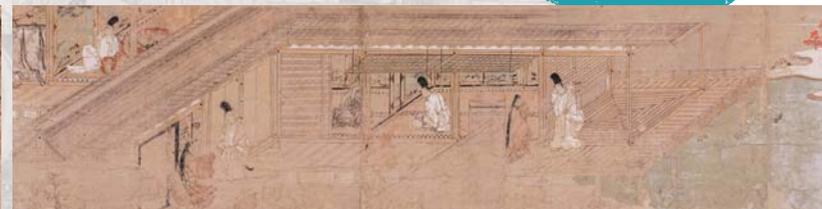
今回展示している作品のうち、DとEの住吉物語絵巻は人物の造形なども一致し、もとは一つの絵巻であったことが明らかです。一方、Fの断簡は同じく住吉物語の一場面を描きながらも、細部の表現が異なり、別の絵巻から分かれたものと考えられます。

ここでは、同じ物語をほぼ同時代に描いた二つのバージョンの断簡を見比べていただきます。

＊掛軸のみならず、絵巻の一部を巻子や箱装に仕立てたものも断簡と呼ぶことがあります。



E 重美 1幅 鎌倉時代・13世紀 A-12092



D 重文 1巻 鎌倉時代・13世紀 A-17 (部分)



F 重美 1幅 鎌倉時代・14世紀 個人蔵

- D 住吉物語絵巻
- E F 住吉物語絵巻断簡

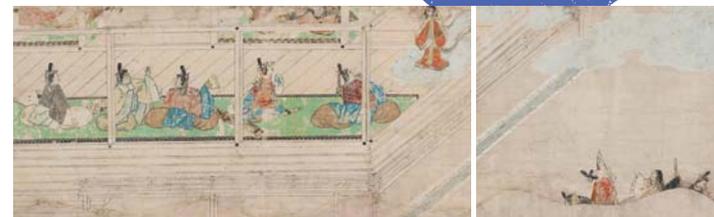
「舟遊図」の名で伝来した個人蔵のFの断簡。昭和11年(1936)、Dの住吉物語絵巻とともにボストン美術館で開催された「日本古美術展覧会」で展示されましたが、もとは別の絵巻から分かれた断簡とみられます。ただ、料紙に掃かれた強い雲母などから、この断簡が鎌倉時代に制作されたことは間違いありません。鎌倉時代における住吉物語絵巻の盛行を知る上で貴重な作品と言えます。

# 絵巻を写す 「狭衣物語絵巻 断簡」

Love Story of Courtier Sagoromo

狭衣中將という貴公子の恋物語を描く狭衣物語絵巻は、もとは四巻とも、八巻構成だったとも言われています。現在伝わる断簡はそのうちの二巻から分かれたもので、画面の下部に同じような波形の損傷痕が認められます。この一巻はもと徳川將軍家の所蔵で、幕末に寛永寺へ「疎開」していたものが彰義隊との戦闘によって焼けてしまいました。そのうち奇跡的に救い出された「断片」を掛軸に仕立てたものが六幅、今日伝わっています。あわせて、この絵巻には戦禍を受ける前に写されたいくつかの模本が存在します。

写真などがない時代、絵巻を写すことは大変労力のいる行為でしたが、先人たちのそのような営みによって、今の私たちは失われようとしていた絵巻作品の主題や、往時の姿を偲ぶことができるのです。



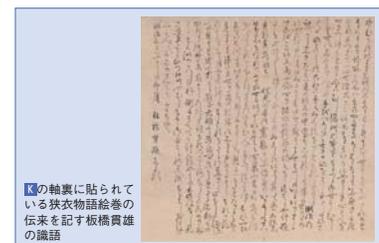
H 重文 1幅 鎌倉時代・14世紀 A-10491  
G 重文 1幅 鎌倉時代・14世紀 A-11951



I 重美 1幅 鎌倉時代・14世紀 個人蔵 (部分)



J 重文 1幅 鎌倉時代・14世紀 A-10446

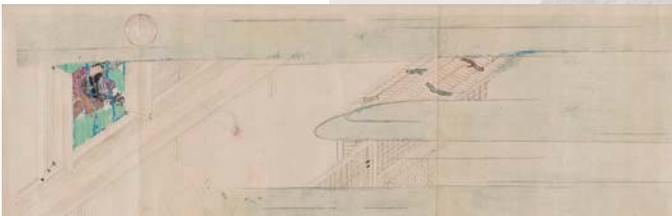


Kの軸裏に貼られている狭衣物語絵巻の伝来を記す板橋貴雄の識語

- G~L 狭衣物語絵巻断簡
- M 狭衣物語絵巻
- N O 狭衣物語絵巻(模本)



L 重文 1幅 鎌倉時代・14世紀 A-26



O 狩野晴川院(養信)模 1巻 江戸時代・19世紀 A-1659 (部分)



N 江村隆夫模 1巻 昭和4年(1929) A-8421



M 1巻 江戸時代・17世紀 A-10131 (部分)



M 1巻 江戸時代・17世紀 A-10131 (部分)

幕末の模本であるOは、一部に錯簡(物語の順序が入れ替わっている箇所)が認められます。この模本には見られず、Kの断簡に付されている色紙は伝二条為氏「源氏物語」濔標の一部。絵巻が断簡となって後、かつての所蔵者板橋貴雄がこの色紙を貼り付けたことが、軸裏に付された識語から知られます。

絵巻が断簡となって後、昭和4年(1929)に一段分のみが写された模本、Nには飛鳥井姫君を扱おうとして失敗し、逃げ去る僧の姿がありますがJにはこれがありません。NはOの断簡から直接写したのではなく、何らかの別の模本から写されたと考えられます。

戦災によりバラバラになってしまった狭衣物語絵巻。画面下部の波状の損傷痕は大変痛々しいものですが、断簡として掛軸に仕立て直すことで再び作品としての「生命」がよみがえったと言えます。「断片」となりながらも、古絵巻を守り伝えようとした先人たちの想いがあった

からこそ、いま、私たちはこれらの作品を鑑賞することができるのです。このような、絵巻の伝来をめぐる数々のドラマと出会うことも、絵巻物断簡を一步踏み込んで鑑賞する方法の一つと言えるでしょう。

# 絵巻が断簡になるとき 「紫式部日記絵巻断簡」

Diary of Lady Murasaki

絵巻がもともとの形態である巻子から掛軸となるのはどのようなときでしょうか。一つには糊離れなどによって一紙ごとにバラバラになってしまい、掛軸に仕立て直したという例。その一方で、人為的に絵巻が切られたという例もあります。ここで紹介する紫式部日記絵巻がその例です。紫式部日記絵巻断簡は、もとは巻子の絵巻でしたが、昭和初年に「切断」されました。その際、一段分が掛軸に、残りは額装に仕立てられ今日に至ります。

ここでは、絵巻が掛軸になる前に写された模本とともに、絵巻が人為的に断簡となるに至った、一つの作品をめぐる生命史について、想いを馳せていただければと思います。



**P** 重文 紫式部日記絵巻断簡 1幅 鎌倉時代・13世紀 A-12091



**Q** 紫式部日記絵巻(模本) 井芹一二郎 1巻 大正8年(1919) A-8375



**P** は昭和8年(1933)、当時の所蔵者益田鈍翁<sup>ますたどんのう</sup>によって分断された紫式部日記絵巻のうち、掛軸に仕立てられたもの。残る3段分の詞と絵

は翌昭和9年(1934)に額装され、現在、五島美術館が所蔵します。**Q** は五島美術館本の絵3図に続いて**P**の絵のみを抜き出して写したものの。

# 絵巻物残欠 愛惜の譜 「二つの物語絵巻断簡」

絵巻という絵画形態の大きな特徴の一つは、物語内容を記した詞書と絵が連続してあることです。詞書があるからこそ、絵に描かれた内容がどの物語の、どの場面を描いているのかが分かります。

しかし、絵巻が巻子から断簡となる際、多くの場合詞書は別の掛軸に仕立て直されるなどして、絵とは別に伝来することもあります。そのため、詞書と分かれ、絵のみとなった断簡が何を描いているのか分からなくなってしまうものも少なくありません。

ここでは、そんな「氏素性」が分からなくなってしまうながらも、異なる道をたどった二つの断簡をご紹介します。

**牛** 車に人物を描く断簡。人々の視線は今も無い、画面左手の何かに向けられています。料紙に引かれた強い雲母は鎌倉時代絵巻の特徴ですが、断簡となり作品名が分からなくなりました。どの絵巻のどの場面なのか、その謎解きをするのはあなたかもしません。



**S** 不詳物語絵巻断簡  
Detached Segment of Illustrated Scroll of Unknown Tale  
1幅 鎌倉時代・13世紀 A-21

**長** らく室町時代の源氏絵と考えられてきた断簡。ところが、今から約35年前、一人の絵巻研究者によって、これが徳川美術館・五島美術館所蔵の国宝・源氏物語絵巻ともとは一具であったことが発見されました。研究の進展が作品の「価値」を問い直したという好例です。



**R** 源氏物語絵巻断簡  
Detached Segment of Illustrated Scroll of The Tale of Genji  
1幅 平安時代・12世紀 A-9

## Column 断簡を保存する珍しい方法

絵巻は紙を横方向に巻くのに対し、掛軸は紙を縦方向に巻きます。掛軸となった絵巻はこの両方の巻き方を経験することになるため、縦・横に折れや皺が発生するおそれがあります。それを防ぐために編み出されたのが「揚げたまま保存する」という方法。画面の状態から、**Q**の紫式部日記絵巻断簡もほとんど縦方向に巻かれていなかったと推察されます。ただ、画面全体が常に空気に触れるこの方法も、作品保全の万全の方法とは言えません。今回の陳列では、この珍しい保存法をご覧ください。箱に収納した状態で展示しています。



**P** 紫式部日記絵巻断簡の保存法

\*掲載した作品のうち、特に表記のないものは東京国立博物館所蔵である。なお、所蔵品には当館の列品番号を付した。  
\*作品タイトルに付した重文は重要文化財を、重美は重要美術品を表す。  
\*本陳列は科学研究費補助金若手研究(A)「絵巻の〈伝来〉をめぐる総合的研究」の研究結果の一部である。

### 断簡——掛軸になった絵巻——

平成25年7月17日発行  
執筆：土屋貴裕  
撮影：長谷川恵 翻訳：東京国立博物館国際交流室  
編集・発行：東京国立博物館  
デザイン・制作：D\_CODE  
©2013 東京国立博物館

